ドルノド編

# モンゴル通信

2014年08月14日

NO.11

担任の先生が同席してくれるようになりました

## 試行錯誤

「アイが泣いた！」と慌てた先生たち。それ以来、授業前に「私、後ろでノートの丸付けしてるから。」「教務室に行くけどすぐに戻って来るから！」と、かなり気を使わせてしまうようになりました。また「クラスみんなでリコーダーができるようになって、保護者に聴いてもらえたら嬉しいよね。」と子どもに声をかけながら見守ってくれる先生や、授業後に「あの子は勉強が苦手なんだけど、歌ったり踊ったりすることは好きだから、よろしくね。」と子どもの様子を教えてくれる先生も現れました。

子どもたちは「叱られなくてもできるよ。」と、少しずつ体と目と耳を向けてくれるようになりました。

そんな時、管理職から「音楽の授業の報告会をするように。」と言われました。報告会？発表会でなくて？モンゴルの教育現場、報告会というものが多いのです。何のため？それは、先生を評価するためなんです。“子どものため”よりも“先生のため”に学校が動いていることが分かると思います。

行事や報告会の際、得意なクラスや子どもだけが舞台に上がることが多い、モンゴルの習慣に疑問を抱いていた私は“全ての子に準備の過程と発表の場を経験して欲しい”“担任に音楽の授業や子どもに感心を持って欲しい”と思い、この報告会で全クラスの子どもを舞台に立たせることを提案しました。

「全員が並べる広い場所もないし、どうせ担任は協力してくれない。私たちの負担が増えるだけだから、やめよう。」と同僚の音楽科教師は反対しました。話し合いを重ね、全学年で行うことは急で難しいため、試しに２、３年生を２クラスずつに分けてやってみること・管理職から担任へ協力をお願いしてもらうことで折り合いがつきました。

## 担任教師や同期隊員のアイデア

歌を作品に（ちぎり絵も初めて）

音楽の報告会に向け、学年を二つずつに分け、２年生は歌を歌い、３年生はリコーダーを演奏することにしました。これまで発表の場に出られなかったクラスの子どもたちと担任は喜びました。授業中、子どもたちが歌いながら歌詞に合わせて身体を動かしていたので「歌に動きをつけてみようか！」と提案すると、担任も色々なアイデアを出してくれるようになりました。

一つは『モンゴルにいらっしゃい』という、モンゴルの広い大地や遊牧文化の素晴らしさを歌ったもので、もう一つは『７つのメロディー』という、ドレミの音階や虹の色に夢や希望を乗せたものでした。皆で歌の動きを考え、歌い込んでいくと、歌の世界が子どもたちの中で広がって行くのがひしひしと伝わってきました。

そんな話しを同じ配属先の協力隊員に話したところ、図画工作の授業で歌を作品にしてくれることになりました。「子どもたち、授業でA4のコピー用紙にしか絵を描いたことがないんだ。皆で一つの大きな作品が作れたらいいなあ。」同期隊員のアイデアにモンゴル人先生たちは興味津々。先生たちも大きな紙に絵を描いたことがないのです。先生、保護者総動員で文房具屋を回り、チョイバルサンで手に入る一番大きな紙がたくさん集められました。

## 大切なことは何でしょう

初めて作った大きな壁画の前で歌う２年生

学校配属の協力隊の中には「モンゴルの教育現場を見て、日本で得意な子の才能を見つけて伸ばすことができていなかったと反省させられた。皆でやることが一概に良いとは言えない。」という考えを持つ人もいます。私たちがモンゴルの教育から学ぶことも多々あるわけです。

しかし今回、二枚の壁画の前に立った子どもたちは、堂々と誇らしげに歌い、演奏していました。その向かいには、暖かい眼差しで子どもを見守る保護者と担任の姿がありました。

関わらせてもらった子どもたちと先生、そして私自身にとって、準備の過程と発表の場は大切なものだったと思わずにいられません。何が正解かは分かりません。一年経った今、“モンゴルの人たちに助けられて、ここで活動できている”ことを忘れずに“子どもを中心に置いて、色々な考え方の先生たちと、一緒にできることを考え、話し合い、見つけていけたらマルかな”と、思っています。音楽を楽しむ心は、幼い子どもの中に潜在的にあると信じています。苦手意識を持つか持たないかは、大人の責任。モンゴルの子どもたちに音楽に対する苦手意識を作ってしまわないように気をつけながら、子どもも先生も楽しめる音楽の授業を紹介し、９月の始業後は、同僚の音楽科教師のサポートをしていきたいです。

（冨井愛）